
白い空気

アクア

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

白い空気

【コード】

N8028B

【作者名】

アクア

【あらすじ】

南国から雪国に上京した青年、鷹山司。雪のある島で暮らすのが夢だった。夢がかなった今、そこには新たな出逢いが…。

北の出逢い（前書き）

出逢い、感動をテーマにした作品です。良かったら読んでみてください。感想等、書いて頂けると助かります。未熟者ですが、宜しくお願ひします。

白い空気

北の出逢い

ある寒い冬の事でした。

雪国に引越してきた僕は、少し困ってました…。

そう、南国で育った僕は、雪なんて…

雪の上を歩くこの季節。いつものように転ばないように慎重に歩いていた…

つるっ…べっ！

やっぱり…

『イテテっ。やっぱり馴れないな。転ばない方法ないのかよ…』

毎日のように尻餅をつく！そんなんで雪国が嫌になっていた頃でした。

クスクスっ…

転んだ僕を見て、笑っている人がいた。

何だよ！しょうがないじゃんか…。と、思いながらも笑ってごまかす。

『大丈夫ですか？』

優しく声をかけて、手を差し伸べてくれた女性は、猫顔でホント可愛い人でした。

白い空気

『あ、有難う御座います。』

何か、緊張してしまった。

『……よく転びます…ね…。』

『ええ？…僕、南の方から引越してきて…、雪ってなかなか馴れないもんでして…。』

クスクスっ。

彼女は、口に手を当てながら笑っていた。見ていて気持ちの良い笑顔だ。

『あの〜、良かったら少し、お茶しませんか？』

『え？まあ…、行きましょう。』

初対面でいきなりの誘いだっただ。この時、雪国の女性は積極的なんだな〜、なんて思いながら付き合っただ。

『私も、育ちは南なんですよ？』

『そうなんですか〜。』

『私も、最初の頃は転びそうになったり！クスクスっ。』

やっぱり、南国から来た人は皆そうなんだ。少し、親近感湧いた。

『でも、もう三年にもなると馴れましたね。』

『あ！俺も！三年たった。今だ転ぶけど…。』

楽しい時は、時間もたつのが早いもので、気付いたら外は少し暗くなっていた。

『あ！もうこんな時間！ごめんなさい…、付き合わせちゃって…。』

『俺は全然平気だよ！良かったら近くまで送るよ？』

『うん…、でも、悪いから…。』

『そっか…。今日、楽しかったです。んじゃね。』

俺は、少し離れがたい気持ちを抑え、その場を離れようとした…

『あの～！良かったら名前お聞きしても宜しいですか？』

『ん？司！たかやまつかさ鷹山司』

『私、とつのみく東乃未来です。良かったら…また、逢えますか？』

『此方こそ。』

未来ちゃんか。積極的だな、何て思いながら歩いて帰っ……つるっ…べっ！

イテテっ…

白い空気

夢から未来へ

なんだか今日は寒いな…。俺は、あまりの寒さに目覚めてしまった。…六時か…。一回、目が覚めると二度寝ができない体質だった。

俺は、渋谷布団から出て、窓に向かいカーテンを開いた…。外は一面雪化粧。白い妖精が沢山舞っていた。

この雰囲気、好きだな…。雪が降つてると決まって外に出る。子供みたいと言われてもしょうがないが、真っ白い雪、とても好きなのだ。雪を踏むと“ギョツギョツ”って鳴くんです。

なるべく凍つてる所は避けて歩く。三年もいて、今だ転ぶのは俺だけかな…。新雪の所をなるべく歩く。これが転ばないコツ！

傘もささずに歩く。手に付きコートにつく雪。ホントに目で見てわかる雪の結晶。人の体温で、すっと溶けてしまう。わずかな時間を生きる妖精。寂しい瞬間だ。

空を見上げれば、無数の妖精。

なんだか、数えてみたくなるんだよね。

俺は、いつもそんな事を考えながら学校へ向かう。

学校は、理容師の資格をとる専門学校。

親が床屋をやってて将来、店を継ぐ事になってるらしい。

そう、俺の未来はほぼ、決まっていた。

だから、働く前にココ、雪国で生活してみたかったんだ。家に戻ったらココでの生活は出来ないし、店を継ぐ前に夢を叶えたかった。だから、敢えてココの学校を選んだ。

学校も、今年の三月で卒業。今は、何処で働くか探してる。

親は、卒業したら地元で就職先を見つけなさい！って言うが、この街が好きだから…、後少し、もう少しいたいな。

歩きながらいろんな店を見る。

あれ？この道…

ふと昨日の女性の事が頭をよぎった。

未来ちゃんだったな…。昨日、この道で会ったんだ。可愛かったな…。

別れ際に名前と電話番号を聞いていた。ぬかりはない！

また逢えたらいいな。

司は、女性に対して非常に奥手と言うか、マメじゃないと言うか…。いつもいい人で終わるタイプ。今まで付き合った人…：0！友達が多かったが、それ以上の進展はなかった。

白い空気

番号を聞いても自分から電話する事もなく、いつも通りになると予想されていた。

就職先を見つける為、街をふらついていた。

キレイで大きな店。若い店員がいて良い教育者のいる店を探していた。

そんな時だった…

ん？ココの店、凄くキレイだな…。

全面ガラス張りのキラキラしたお店。四季によってイベントやサービスを変えてるらしい。面白いお店だな。店内のデザインも良く、候補の一つにあがった。

何度かお店の前を行き来していた…。中から店員が…

『あ…、どうかしましたか？』

怪しそうな目つき。当たり前ですよね…。

俺は、少し焦った様子で…

『あ…、キレイなお店だなんて、専卒って募集してるかなって…、思っています…。』

『あ！少々お待ち下さい。良かったら寒いでしょうから、お店の中で…。』

素敵な笑顔だった。思わず入ってしまった…。

まだ、決めた訳じゃなかった。成り行きで入ってしまったが大丈夫なのか？

待ってる間、色々と考えてしまう。場違いかな…、ココにいていいのかな…。不安と緊張で冷や汗が…。

『すみません、お待たせしました。こちらへどうぞ。』

女性スタッフに連れられ、奥の事務所らしき所に案内された。

お店は、暇だったらしく皆さん注目されてました…。

女性スタッフの多いこのお店。俺は、自然と俯いていた。

『あれ？司君？』

ん？誰だろ…。このお店、来た事ないけど…。

すつと振り向いた。

『あれ？未来ちゃんじゃん！』

偶然にも、未来の働いてるお店だった。俺は、大学生だとばかり思っていた。それだけにかなり驚いた。

未来は、ニコニコと笑顔で手を振っていた。

俺も、胸元で小さく振りかえし、奥に連れて行かされた。

このお店は、美容室っぽいづくりの理容室。いわゆる unis

ex salon だった。男性と女性と両方を目当てにしたお店最近、増え始めているらしい。ちょうど男性スタッフを募集していたらしい。

『卒業したら、改めておいで。席空けとくから!』

店長に、そう告げられスタッフルームを出た。

寂しがり屋な店長。男性スタッフがあまりいない為、肩身の狭い思いをしてるらしい…。その事で長々と話に付き合わされていた。少し愚痴っぱかったけど…。

部屋を出ると雰囲気が一変していた。お客さんの来店。忙しそうだった…。

わぁ…、結構忙しいお店なんだ…。

何て事を思いながら、軽く挨拶を交わしお店を出ようとした。

『ちょ…司君?』

『はい!』

後ろを振り返ると未来が呼んでいた。忙しそう感じたからとりあえず店を出た。

未来は、無視されたと思ったのか、慌てて追いかけてきた。

『何で行っちゃうの?』

少し怒ったような表情で引き止められた。

『何でって…、なんか忙しそうだったから…。』

まだ、ココのスタッフって訳じゃないし、雰囲気も慣れてない。そんなんで、少し店にいくかった。

未来は、眉を寄せて睨んできた。

『何で電話してくれないの？昨日の夜、待ってたんだよ？……ちよつと忙しくなってきたから…、電話するね！ちゃんと出てよ！』

そう言っただけで店に戻って行った。

俺は、呆然と立ち尽くしていた…。

ガラス越しから中の様子を覗いていた。皆、いい笑顔で働いてる…。外から見ていて、なんか気持ち良かった。

このお店、結構好きかも…。素直にそう思う自分がいた。

こんなお店で働きたかった。明るく爽やかなスタッフ。俺も、そんな人になりたい。

卒業したら、このお店で働かせてもらおう。

そして、一人前のデザイナーになって家に帰ろう。

これが、俺の目標だ！

白い空気

子心

俺は、初めて親に手紙を書いた。いつもなら、電話やメールで伝えるのだが、手紙で気持ちを伝えるってのもいいかなって…。

・　・　・　・　・　・　・

親父、おかん、元気でやってますか？俺は、頑張って生きてます。今まで、親元でのんびり生きてきた俺が、一人で生活して三年。生活するだけで結構大変です。親父達の苦労、わかる気がします。卒業して実家に戻るつもりでしたが、もう少しここにいようかなって思ってます。心配ばかりかけてごめんな？

頑張って一人前になって帰ってくるから！待っていてくれよな！
わがままばっかの俺だけど一つ宜しく！

鷹山 司

・　・　・　・　・　・　・

手紙って、素直な気持ちで書けるって言うか、なんか…いいよね。

夕陽も沈む頃、この手紙をポストに入れに行く事にした。

夜になると、雪も凍りつき少し緊張…。

雪道を歩きながらふと思う。

親父達…、元気でやってるかな…。たまにホームシックになった

りして。

その時、携帯がなった。

ん？誰だろう…！未来だ…。

まだ、仕事は終わってないはず…。何で？

『もしもし…。』

『司君？今何してるの？』

何かの誘いかな？この人は、いつもいきなりだよね…。

『ん？今、ポストに向かっているよ！手紙出そうと思って…。』

『夜、皆で飲みに行かない？今日いた店の子だけ…。』

やっぱり…。ま！バイトも休みだしいいんだけど…。

司は、案外人見知りで、知らない人と何かをするって事があまり好きではない。

勤めようと思ってるお店だし、少しでも顔を合わせておくだけでも違うかな？

『いいよ。何処で飲むの？』

『お店終わったら、また電話するね？また後でね！』

……。
一方的な人だな……。B型かな……。とりあえず、これをポストに入れてアパートに戻る事にした。

夜になってもずっと降ってるな……。今日、一日中降っていた。夕方通った道。足跡をつけたのに帰る時には真っ白に……。なんか、少し笑ってしまった。何が面白いつて訳じゃないが、少し嬉しかった。

……。
お風呂に入り、少しお洒落な服を着、電話がくるのを待っていた

……ブ……ブーブー……

あれ？……やべえ！

どうやら待ってる間に寝てしまったらしい。

『はい！鷹山つす。』

半分寝ぼけた感じで電話に出た。

『……良かった。何かあったかと思った……。』

どうやら、電話先は店の中らしい。騒がしさが、そう思わせた。

『ごめん……。なんか寝ちゃった。』

『そうなんだ……。これからどうする？来る？』

なんか、面倒だな…、なんて思いながらも誘ってくれたから…。
未来の顔をたてるってのもあるが、場所を聞き、とりあえず行く事
にした。

『今から行くよ…』

『うん！待ってるね！』

まだ九時か…。このまま寝たらどれだけ幸せか…。そう思いな
がら飲み屋に向かった。

幸せの地から極寒の地へ……。

故郷

夜の雪道ってやっぱ危ないな…。

なるべく雪のないアスファルト、凍ってない道を踏み歩く。雪は、一段と降りしきり、風も吹き始めていた。

あゝ寒いな…、なんて思いながら店に向かった。鼻毛も凍るって、この事だな…。零下何度か何てわかりもせず、ただ歩く。鼻から吸う空気は、とても痛く、なんだか凍る思いだ。

氷を蹴りながら前に進む。たまにやると結構面白い。あまり夢中になると転ぶので注意して下さい。

そここうしてる間に、繁華街まで来てしまった。駅の周辺は栄えていて、とてもキラキラしているネオン街だ！道一つ間違えれば雪の道。

この道まで来れば安全だった。パチンコ店、海鮮市場、飲食店、キャバ、クラブ。色んな店が立ち並ぶ中、俺が目指していたのは、居酒屋“呑”！いかにもって感じ…。

俺は、酒が強い訳じゃなく、好きって訳でもなかった。でも、居酒屋の雰囲気ってのだけは、なんか落ち着くんだよね。

少し緊張してきた…。仲間と飲む事はあっても、一人で店に入るとして事、知らない人と飲むって事はなかった。深呼吸をし緊張を紛らわせる。

ガラガラ…

店の中はかなり騒がしかった。思わず笑顔が…。この雰囲気って…好きだな。店の雰囲気緊張の糸をほぐしてくれた。

店の中は暖かく、料理の匂いと明るい活気！俺は、この暖かい空間に飢えていたせいかな少し安心した。

『司君！』

少し離れた所から呼ぶ声がした。

俺は、キョロキョロしながら声の方へ向かった。

そこには未来とその仲間達がテーブルを囲んでいた。

『すみません…、遅くなりました。』っと言いつつちゃっかり未来の横に座る。皆、同年代っぽいな。店長やチーフとかは抜きの飲み会らしい。

俺が席についた頃には、皆ほろ酔いになっていた。

席について焼酎を飲み、少し落ち着いた頃、自己紹介が始まった。

『司君！皆、本店のスタッフだよ。右から…綾乃ちゃん、静香ちゃん、恵ちゃん、京子ちゃん。そして私が未来ちゃん！』

な！知ってるよ…。未来かなり酔ってるな…。なんて思いながら愛想を振りまいた。皆、女かよ…。いつも男ばかりで飲んだから…なんか…。

『俺、鷹山司です。宜しくお願ひします。』

軽く挨拶を交わし店員を呼んだ。皆、結構飲んでるな…。どれくらい飲んでるのか気になつたが敢えて聞かなかつた。

少し赤ら顔の未来。なんだか色つぽかつた。店員に焼酎を頼み、少しずつこの雰囲気に溶け込んでいった。

大体、こういう席は、店、仕事の愚痴。お決まりだつた。

店の事もスタッフの事もなんもわからない俺。ただ、皆の話に耳を傾けていた。

焼酎三杯目を飲み干した時、未来が肘でつついてきた。

『どおしたの？元氣ないよ？あまりこういうの好きじゃない？』

未来は、もうどの位飲んでるのか、想像もつかなかつた。目はトロンとし、ろれつも回つてなかつた。俺の事を心配してくれてるみたいだが、未来の方が心配だよ…。

『ん？そんな事ないよ。このお店…好きだな…。なんだろ、何かいいよね。』

俺は、微笑みながら焼酎を飲み干した。未来もつられるようにお酒を飲み干した。

白い空気

『…。このお店、好きなんだあ…。チェーン店とかと違って故郷の匂いって言うか、雰囲気を思わせるから…かな。』

未来は、微笑みながら俺の顔を見、俯いた。お酒を見ながら少し微笑み、遠くを見ている様な目をしていた。

「何でこんなにお酒を飲むのか、わかる気がした……。やっぱり、寂しいのかな……。」

『たまには実家に帰るの？』

つまみを食べながら問いかけた。

未来は、少し困った表情で答えた。

『実は……ずっと帰ってないんだ……。』

少し落ち込み気味な未来。はあ……とため息を吐き、やけ酒を飲むようにお酒を飲んだ。俺も最近、実家に帰っていなかった。それだけに痛いほど気持ちが悪わってきた。心の中では、実家に帰り親を安心させてあげたい。常に思う。だけど……。気が付いたら楽しい飲み会がしんみりした場へ変わっていた。

『今度、一緒に帰ってみる？』

未来は、目を見開き驚いた表情で俺の顔を見つめていた。

未来の表情を見て“はっ”と我にかえた。思わず焼酎を飲んだ。

ただ、単純に二人なら長旅も退屈しないで行けるかなと思った。

でも、未来には違う意味に聞こえたのかも……。

沈黙が続いた。気まずい雰囲気。その沈黙を破ったのは未来だっ

た。

『ありがとね…。司君って優しいんだね。』

照れを隠すように微笑み、お酒を飲んだ。

俺は、思わず未来に見とれてしまった。未来が“ん？”って顔を
した時、慌ててごまかすように周りを見た。

“ありがと”の言葉がヤケに響いた。優しく微笑む未来。酒を
飲んでるせいか体が火照ってきた。

雪の音

気が付いたら夜中の2時を回っていた。

俺、明日…もう今日か！学校あんだよな…。

女って、酒強いな。改めて思った。まだ飲もうとしてる綾乃。かなり眠そうな京子。そして、すでに寝てる未来…。

『明日、学校だから先に上がりますね。また、良かったら呼んで下さい。』

綾乃は、ニコツと微笑み手を振った。

俺は、フラフラになりながらも自力で帰る事にした。

『司君？良かったら未来送ってってくれない？』

ろれつが回ってない…。綾乃はまだ飲み足りないのか帰るつもりはないようだ。目が据わり頬を赤らめタバコを吹かす。俺は、女を美化する癖があって、出来ればあまりこういう姿は見たくなかった。

アパートの通り道ってのもあり、おぶって帰る事にした。

皆に、軽く挨拶を交わし、店を後にした。

風邪を引かないように、俺のコートを羽織らせておぶった。

あれ？軽いな…。おぶって初めて知った。会う時はいつも厚着だ

ったからわからなかったけど、かなり細いんだな…。

…。
雪の降る中、せつせと歩く。おぶって転んだじゃ済まされないな…。

未来の温もりを感じながら思う。

“一緒に帰ろ”って言った時、どんな気持ちだったのかな…。

頭に雪が積もり、コートにも積もる。でも、俺は…俺達は…なんか、暖かい空間にいた。たまに体の位置を直すように“ヒョイ”と未来を浮かす。

気持ち良さそうに寝てるな…。少し嬉しかった。未来の寝顔を見た事、こんなに身近にいる事、彼氏になった気分だ。なんてね…。

それにしても、今夜はよく降るな…。夜の雪は、月の光だけで明るく見せる。真っ暗でもちゃんとわかるんだ。暗いのに白い。考えてみると凄いなのかも…。そんなくだらない事を考えていたら未来がもそもそ動きだした。

『あれ？どこだあ…。寒い…。』

少し眠たそうに目を擦る未来。寝ぼけてんのか？

俺におぶられてるのに気が付いたのは言うまでもない。

『あれ？司君…。ごめんね！』

未来は、急いで背中から下りた。恥ずかしいのか嫌だったのかは

わからなかった。

もう少し、あの時間が続けば良かったな……。俺の背中には、未来の温もりと香水の香りが少し残っていた。

『ごめんね……。寒かったでしょ？ハイ！コート。』

未来は、笑顔で優しく肩に掛けてくれた。

『ありがとう……。』

袖に手を通し、また歩き始めた。この時間好きだな。

なにを話すでもなく、ただ歩いていた。

足元が覚束ない未来。

『酒飲み過ぎなんじゃん？』

俺は、少し笑いながら問いかけた。

『司君があんな事、言うからじゃんさあ……。』

ほっぺたをぷくつと膨らませ怒ったフリをする未来。可愛い。

あんな事？未来の顔を見ながら思った。酔ってるな……。自分で何言ってるかわかってるのか？未来は、一人でブツブツ呟いている。そんな未来を見て思わず吹いてしまった。なんか、可愛かった。

いきなり笑い出した俺を見て、驚いた表情をする未来。そしてつ

白い空気

られて笑い出した。

シーンとした裏路地。雪の落ちる音しかしない道。俺達の笑い声だけが響いていた。

ありがとうの言葉

雪も徐々に少なくなってきた頃。

理容の専門学校に通っている俺は、一つの壁にぶつかっていた。

資格を取るための筆記試験と実地試験！これを取らないと先には進めないのだ。

伝染、消毒、物理学、公衆衛生…色んな科目。医療関係みたいな勉強をしていた。

毎日のように勉強をし、学校の仲間と協力し合う日々の努力。今まで、こんなに頑張った事はなかった。合格したくて…。皆の喜ぶ顔が見たくて…。

そして合格発表…

俺は、仲間の前では、かなりの余裕っぷりを出していた…が、内心かなり不安だった。

数字だらけのボード。ボードの前は人だらけ。強引に中に突っ込む。ある意味、一番の山場なのかもね…。

押され蹴られでどうにかボード前に来る事が出来た。

ため息をついでいる暇はなかった。

後ろからドンドン押してくる。自分の番号を探さないと…。 63

2はと…。お！600があった。
630 631 632 633
…

一瞬、動きが止まった。何故か今まで騒がしかったのに、時が止まったかのように静かだ。

あった……！

緊張の糸がほぐれたかのように、人の波に流されて行く。

あぶね！大混乱の中、どうにか抜け出した。

番号を確かめる。632 だよな…。改めて実感した。嬉しかった。思わずうつすらと目に涙を浮かべる。やった！周りを振り返り誰かを探した。誰……、未来。

この時、不思議と未来の笑顔が頭をよぎった。未来に言いに行こう。親でなく、仲間でなく、未来に…。

学校を出て、真っ先に向かったのが、未来のいるお店“Whit e Care”まだ、寒さも残るこの季節。俺は、汗だくになりながら店に向かった。

あれから、何度となく顔を出していたせいか、スタッフにも知られていて居心地の良い店になっていた。

昼間は、比較的暇なお店。店のガラス越しで合格証書を掲げ、満遍の笑みで仁王立ち。そして、Vサインをした。

店の中では、指差している人、見て笑ってる人、接客してて気付

かない人…、様々だったが、未来は、俺を見て笑っていた。

未来は、お客さんに入っていた為、少し遠慮がちに胸元でVサインをし微笑んでいた。お客さんにも教えていたみたいだった。

店長とスタッフ何人が、俺の事を祝福しに店から出て来てくれた。そこには綾乃の姿もあった。

店長は、『良かったな！』って、俺の頭をぐしゃぐしゃにし、一緒に喜んでくれた。もちろん綾乃も、他のスタッフも喜んでくれた。

おかげで店の前は大騒ぎ！店長なんか、歩いてる人にまで…『こいつ免許取ったんですよ！』少し恥ずかしかった。でも、嬉しかった。

皆に“良かったね”って言われたかった。……でも、一番に言うて欲しかったのは…やっぱり未来だった。それだけに……。嬉しかった…けど…。

未来の事、少し待つことにした。“チラッ”と見れば目が合う。気にしてくれてるのが少し嬉しい。だけど、接客中の未来は俺の所には来れなかった。

日も暮れて店は忙しくなる一方。お客さんの来店が多くなってきた。いっぱい帰る人、待つ人。気付いたら、皆接客していた。忙しいな…。

白い空気

店の看板に灯りが灯された。電灯にも灯りが灯される。徐々に気温も下がり始め、冷たい風が吹き出した。寒い…。何で今日に限って…。俺は、未来に“おめでとう”って、言っただけだった。ただ、

それだけなのに…。

なんか、待ってるのが辛く思えてきた。諦めて帰る事にした。

最後にガラス越しから未来を見た。忙しそうにシャンプーをしていた。やっぱりダメか…。

昼間は、比較的暖かいが、日が暮れると冷たい風が吹く。夜空を見ながら思った。

せつかく合格したのに…。

合格証書を持ちながら、虚しさだけが残る。街はこんなに明るく活気ずいてるのに…。俺の心は真っ暗だ。

アパートに着き、テレビをつける。お笑い番組がやっていた。

お笑いを見ている面白くない。

俺…何やってんだろ…。

合格証書を机の上に置き、少しボーンとしていた。何もするきが起きなかった。

ブーブー…

携帯が鳴っていた。

誰だろ……。未来？

急いで携帯を開いた。画面に表示されていたのは“実家”……。あれ？なに期待してんだ？鳴り続ける携帯。とりあえず出る事にした。

『もしもし。』

『あ！司？今日どうだったの？発表あったんでしょ？』

電話の相手は母親だった。少し心配そうな声で、でも、懐かしい声。いつもなら少し安心していただけのかもしれない……。

電話をしながらも、頭の中では未来の事しか浮かんでこなかった。

『うん。受かったよ……。』

電話先の母親は『そうなんだ、良かったね』と。ホントはもっと嬉しかったはずなのに……。何で……かな……。

母親は、少し安心したのか明るい声になった。俺も、『うん』って、返事をし頷くが、話に集中出来なかった。案の定、内容なんて全然覚えてなかった。

電話を切り、テレビの音だけが響く部屋。寂しいな……。ふと思う……。何で未来だと思ったんだ？

なんで……。

心臓の鼓動が激しくなる。あれ……。

ブーブー…

そんな時、また携帯が…。

少し手が震えた。喉が鳴り、一瞬…このワンコールがヤケに長く感じる。

『もしもし。』

携帯の画面も見ずにでた。かなり動揺していた気がする。

『司君？』

未来だった。

『あれ、司君？どしたの？』

俺は無言だった。頭の中では、沢山話しているのに…。未来からの電話、嬉しかったはずなのに…。素直に喜べない自分がいた。

『……………ごめん、今…、忙しいから…。』

ピッ、ブーブー…

電話を切った。

なにやってんだろ……。

白い空気

その後、
何度も電話がかかってきた。
でも、
出る事はなかった…。

好きになるって…

昨日は、やっぱりまずかったかな。電話で冷たくした事。その後、電話に出なかった事。今更、後悔していた。

最近、妙に未来の事が頭から離れない。何かにつけて未来がからむ。

そんなこんなで、学校で初めて仲良くなった友達、太一に相談してみた。

『もしかして、恋した事ないん？』

『恋？』

太一は、ポカーンとした表情でくわえていたタバコを落とす。

『今時、珍しいって、ゴキブリ探すより難しい。保護団体が黙ってないぞ！』

太一は、自分で言って勝手にウケていた。俺は、バカにされてるみたいで、少しムツときた。

『それは、その…未来ちゃんだけ？好きになっちゃったんじゃない？自分で、気づいてないだけっしょ！うん！』

腕を組み、一人納得したような表情で頷く太一。

『好きになっちゃった？』

俺は、正直驚いた。可愛いなって気持ちにはあった。でも、好き…。

『話聞いただけじゃわからんから、今度、店行こう。司ってこう見えて、結構センスあるかんね!』

目をキラキラさせながら興味深そうな顔をする太一。

こう見えてって…、店まで行くのかよ…。絶対、何か裏があるな…。太一は、興味深い事、面白そうな事があると自然と目をキラキラさせる癖がある。

『何か、企んでないだろうなあ!』

少し睨んだような顔で太一に言い返した。

『大丈夫だよ!司の彼女はいらないからさ!それに、俺、まだ店決まってるから、ちよっと見てみたくなったんよ!』

いつもふざけてばっかの太一。でも、今回の件ではあまりふざけた感じはなかった。

お互い資格を取れたってのもあり、卒業待ちの俺達は、学校が終わったら店に向かう事にした。

実技の授業中も考えていた。

今日は、レイヤーの実習だった。ウィックの髪を切り、そのスタイルを完成させる。

櫛で毛束を取り、ハサミでカット。

『おい！司、何してんだよ！』

太一が、驚いた表情で止めに入った。

ん？俺は、何すんだよって太一を見、ウィックに目をやった……。げっ！

フロント部分を短くカット！ヤバい！と、思い先生に見つからないようにごまかした。

ウィック一つで何千円もする人形。いきなり短くすると後で使えなくなる為、ムダにするな！って、耳にタコができる位聞かされていた。

何やってんだ……。授業も手に付かない。俺は、未来の事が好き……。なのか？

実習もなんとかこなし、今日の授業をクリアした。

結局、ずっと未来の事が頭から離れなかった。

『司！行くぞ！』

太一は、さっさと帰り支度をしていた。

『行くつて、何処へ？』

『はぁ？店だよ！未来ちゃんに会いに行く！』

あ！すっかり忘れていた。終わったたら店に行くんだった。

ていうか、何で太一が未来に会いに行くんだよ…。

店行くのか…。

あまり気が乗らなかった。どんな顔して会ったらいいかわからなかった。

本音の心

『早く来いよ!』

太一は、意地悪そうな笑みを浮かべ俺を呼んだ。

『わかったよ!』

渋谷店に向かう。昨日の電話の件で、どうしても行く気にならない。太一に強引に引っ張られ向かった。

太一は、これから遊園地に行く小学生みたいな笑顔をしている。

それに比べて、俺は、別れる寸前のカップルみたいだ…。

何で、電話…出なかったんだろ…。ため息しかでない。

徐々に騒がしくなる街並み。この先、人通りの多い通りに出て左に曲がると、未来のいる店 White Care。曲がりたくない…。

『ここら辺だったよな! たしか!』

楽しそうだな…。俺は、店に近づくとつれ青ざめていくのがわかる。

『と・お・ちゃ・く〜!』

ついでしまった…。

ガラス越しから店の中をそつと覗く…！はあ！俺は、思わず驚いて尻餅をついてしまった。未来が、店の一番手前（通り沿い）の椅子で接客していたのだ。まだ、未来には気付かれてないようだ。

『あははは…。何やってんだ司！』

太一は、それを見て大爆笑！

店の外から大きな笑い声。気にしない方がおかしい。案の定、未来に見つかり、目が合ってしまった。

お互いに気まずそうな雰囲気。未来は、一瞬、表情が固まった。そして、口パクで“待ってて”って、そう告げて仕事に戻った。

ヤバいなあ…。と思いながらも、その反面、流石にプロだなんて、思ってしまった俺だった。

『司！あの子が未来ちゃんなん？』

太一は、未来の事を指差して聞いてきた。

『バカ！指差すんじゃない！』

やっぱり、連れて来るんじゃない…。ココでも後悔する俺…。待っててって言うてる未来、なんだか真剣な顔してたな…。

白い空気

店の中で、店長と話てる未来。どうやらカットだけやって違うスタッフとチェンジするらしい…。って事は…！来たあ！

太一も、その異様な空気を読んだのか、その場から少し離れた。

怖え〜！

未来が来た。

『司君！ちよつと来て！』

未来は、真剣な表情で、司を店の裏に連れていった。太一を置き去りにして…。

ヤバいかな…。行っちゃっていいのかよ…。司は、この異様な空気に殺気すら感じさせる未来の背中を見ながら後をついていった。

太一は、司の背中を見て思った。“小せえ！アイツは死んだな。”手を合わせて祈る太一。

人気のない店裏。そこで未来は急に怒り始めた。

『司君？私が何で怒ってるかわかる？』

何か、先生に怒られてる心境だな…。ココでハイハイ言っているのか？男だろ！司！って、自分に言い聞かせるが…弱え…。

『お怒りは、ごもつともです。』

ちよつとふざけて見たりして…。

白い空気

『何で、ふざけてんの？連絡ないし！電話出ないし！司君家知らないし！心配したんだからね！』

未来は、本気で心配してくれてたんだ…。真面目に怒っていた。少し唇を震わせていた。こんな未来を見たら、ふざけた事は出来ない。俺は、心底思った。

『ごめん…。ごめんな?』

素直に謝った。そんなんで許してもらえるなんて、これっぽっちも思ってたなかった。でも、本気で謝りたかった。

司の気持ちのこもった謝罪。未来は、それを受け止めたのか、少し口調が柔らかくなった。

『司君が、店の外で皆に“おめでとう”って…。私だって…。私だって言いたかったんだよ?でも、仕事しなきゃいけないし…。』

未来は、目にいっぱい涙を浮かべ、俺の事を見つめていた。

『絶対に言ってるって!今日必ず言ってるって…。』

俺は、たまらず言った。

『未来?もういいから…。悪いのは俺だし、未来の気持ち…。ありがとうね。』

俺は、抱き締めたかった。ギリギリの所で、ブレーキがかかった。付き合ってる訳でもないのに、そこまでは…。でも、心の底からありがとう。初めて思った。人に対して心底思った。

白い空気

未来…ありがとう…

可愛い嘘泣き

キヤー…

ウワァー…

『す…すげえ…』

ジェットコースターを見上げていた。俺は、絶叫マシンが苦手
でいつも逃げていた。でも、今日は…。天気も良く、俺達の為に晴
れてくれた…みたいな？

未来、嬉しそうだな。少し見とれていた。

『ねえ、ねえ！あれ凄いな！あれ乗ろ？』

未来は、無邪気な子供みたいな笑顔でジェットコースターを指差
していた。

やっぱり…。最初っからか…。

そう、誘ったのはあの有名な遊園地“富士山ハイランド”ジェッ
トコースターがかなり凄い！

俺は、未来の笑顔を見て思い出していた。

あの時、真面目に謝っていて良かった…

『あの…さ…、俺…ずっと思ってたんだ…。何で、電話出なかったんだろ…、何で、あんな冷たい事言ったんだろ。ずっと後悔してたんだ。だから、お詫びじゃないけど……どっか行かない？って言うか、未来と行きたい…かな？』

俺は、初めて女を誘った。後で考えたら、こんな時に誘うなんて有り得ないな…。

いきなりの誘い。“OK”なんて、してもらえとは思ってはいなかった。

『ん…、どしよかな…。』

未来は、少し俯きながら考えていた。

えーマジ！OKって事！

『遊園地がいい！司君がジェットコースター全部一緒に乗ってくれるならいいよ。』

未来は、手を後ろに回して、ニコニコしながら…。まるで小悪魔みたいな笑顔だった。

全部って…何処行こうとしてるんだ？こういう時の未来って、ヤバイよな…。でも、未来が喜んでもらえるなら…。

そう思った時、自然と顔が緩んでしまった。

『是非、宜しくお願いします。車だすから、任せてください！』

どうにか、和やかムードになった。二人で少し笑い、仲直り。もうこんな雰囲気は味わいたくなかった。ずっと笑顔でいたい！そう、素直に思った。

『東乃！ちよつとチエックいいか？』

店の方から未来を呼ぶ店長。

『あ！お客様変わってたんだ…。ごめんね…、またね。』

未来は、ワザとらしく泣き顔をつくり、そして微笑んだ。急いで店に戻って行った。

フフっ…嘘泣きした時の未来。ちよつと可愛かったな…。思わずニヤついてしまった。

『何、ニヤついてるの？』

未来は、怪しい目つきで俺を見ていた。

『オホッ！ンン、じ、じゃ行こっかあ…。』

ま！気を取り直して、歩き始めた。

ジェットコースターは苦手だけど、未来と一緒にならいいか…。何だかんだ、いい思い出になればいいかな。

トラウマの遊園地（前書き）

富士急ハイランドをモデルとした作品です。これから行く人は見ない方が良くもなりません。少し長くなってしまうましたが、良かったら読んでみて下さい。

白い空気

トラウマの遊園地

仲直りした俺達は、未来の休みの日に富士山ハイランドに行く約束をしていた。

そして、今、絶叫マシーンに乗るために並んでいる。

俺は、子供の頃、苦い思いをしていた。絶叫系で意識が飛びそうになったんだ。トラウマってやつかな…。正直、ビビってます。

未来は嬉しそうな表情で、『司君？楽しみだね!』。俺は『そうだね!』って…。口元が引きつっていたに違いない。

一歩、また一歩。徐々に近づいてくる絶叫マシーン。心なしか足が震える。

『なあ未来？やっぱりやめよっか!』

かなり弱気だった。

『ダメだよ？せっかく来たんだもん!』

未来は、ほっぺたを膨らませ、少し上目ずかいで俺を見つめた。

『だよね…。』

覚悟を決めないと…。心なしか心臓が…。

どっからともなく聞こえてくる悲鳴。歩いていると…『ドッドッ

パツ、ドツドツパツ…』なんじゃこりゃ！なんか、胃が痛い…。

あ…、目の前にマシンが…。ハイランドで人気の絶叫マシン。“ドツドツパツ”未来から『これはヤバイよ？』っと、前々から聞かされていた。

ついにマシンに乗る時がきた…。係員が歩いてくる…。かなり頑丈に固定。シートベルトも締め、万全な体制で望む。

『あゝ、これ苦しいんですけど…。』
俺は、係員に言った。

『安全対策の為、申し訳ありません。』

『はあ…。』

もうダメだ…。でも、あの係員、可愛いな…。

崖っぷちにいなながらも、お気楽な俺…。ふと未来の方を向いた。
……………睨んでいた。

『すみません…。痛っ！』

未来に、腕をツネくり返されていた。

『司君！今日は覚悟してね！』

俺は、思わず俯く。安全装置はきつく、未来も怖く、なんかな…。

そうこうしてる間に動き始めた。

『うわぁ…!』

『まだだよ!』

未来は、余裕な表情で待っていた。

スタート地点まで移動するらしい。

ウイイイ…ガシャン…シュウウウ…

3・2・1…

……!

未来が、俺の手を握りしめた。え…!

ドツドツパツ!

未来が俺の手を握りしめた事より、息が出来ない! 凄い… スピード! 死にそう…。

『うわぁぁぁぁ!』

俺は、目から涙が…。

白い空気

『ぎゃぁぁぁ!』

未来も叫んでいた。

俺は、前にあるバーに掴もうとした…未来が手を上げてるんだよなあ…。俺と手、繋ぎつばなしなんだよな…。

凄く高さから急降下！

『うわああああ！死ぬ！無理無理無理…ダアアア…！』

そして、最後の方で“カシャ！”…あれ、何だ？フラッシュがたかれたような…。

とりあえず、一つ目終わった…。

『未来？何だよコレ…。最初っからすげえ加速じゃん！息はけないんだもんさあ…！』

『そだねえ！楽しかったあ！』

え…！未来をマジマジ見つめた。

『プツ！あははは…！』

未来の頭がボサボサで思わず吹いてしまった。

未来は、いきなり笑い出した俺を見て驚いていたが、その原因に気づき…

『あ〜ん、やだあ…！』

唇を尖らしながら、鏡を見て急いで直した。

いつまでも笑ってる俺に…

『笑わないの!』

唇を尖らせ、怒りだした。その未来の表情…、可愛いな。俺は、優しく微笑んだ。未来もニコツと微笑んだ。

下に降りると、テレビにいつぱい映されていた。未来が何か探している。

『未来?何してんの?』

未来がテレビを見ていた。俺も一緒に見る事にした。

……!

『あれ?何だコレ!』

俺達が映っていた。それも凄い顔で…。

『未来もすげえ顔だな!』

『見ないでえ!』

未来は、俺の背中を押し、その場を後にした。

ドツドツパツに続き、富士山と縦続けに絶叫マシーンに乗った。

あまりの絶叫ぶりに足腰がガタガタ……。そこで、少し休憩がてらに昼食をとる事にした。

パラソルのあるベンチに座り、お店で買った食べ物と飲み物を並べた。

ジュースを飲み、クリームパンとトルコのナンでお肉を挟んだサンドイッチを食べた。少しゆっくり、まったりした。

『俺…こうやってまったりした時間好きなんだ。』

未来は、黙って俺の事を見つめて聞いていた。

いつも一人でいるせいか、仲間といる時間、未来といる時間…凄く大事にしたい。

『いつも、未来が傍にいてく……。おほん！』

未来は、シツカリ聞いていたようだ。思わず口がすべってしまったとはいえ、どう誤魔化そうか…。逆にもじもじしてしまった。

『傍に…何？』

未来は、サラッと言う。

『ん？な…何でもない…。』

未来は、ふぐん！っていうような顔で見つめる。俺は、その未来の瞳から目をそらし、そっぽ向いた。

『さあ…次行きますよか…、ね？未来さん！』

『はいはい…』

ニコニコしながらゴミを片付け、少し化粧を直す未来。

女は時間がかかるんだよな…。俺は、待つてる時間、人間観察をしていた。

色んな人がいた。若いカップル、家族、外人さん…。

あんなに肌見せちゃって…。夏だねもう…。キョロキョロしながら時間を潰す。

未来と一緒にいる時間。何もしなくても、退屈しない。こんな彼女…欲しいな。

準備も済み、いざ、“ええんでないか”へ…まだ、終わらない地獄への道。

下から見てみた。徐々に上がり、急降下、その時に椅子までローリング。まあ〜キレのあるマシンだ事…。行きたくない…。

未来に手を引っ張られ、強力に並ばされる。凄い人気で、平日なのに、二時間待ち…。

未来といると、二時間なんてあっという間だ！気付いたら次に…。あ…、また雄叫びが…。

やっぱりかなりの安全装置！ガッチリ固定！最初はバックで徐々

に上がり……

『ダアアアア！やべえ！落ちる……！足がああああ……！』

未来も、流石に参ってたな……。頭がやっぱりボサボサで……。その後、北郎の店行って、敷地内うるちよろして……。何だかんだ日が暮れ始めていた。

『最後に記念写真を撮ろうよ！』

未来は、少し疲れたような表情で言う。

水上ボートの所で夕陽をバックに……。カシヤ！

ええんでないかの所で……。カシヤ！

最後に、ゲートの所で……。カシヤ！

車に乗り、帰る。少し切なくなる感じがした。疲れたけど、いざ離れるとなると、少し寂しい。

未来も疲れたのか、助手席で眠ってしまった。

俺は、運転しながら思った。また、こんなふうに未来と二人でいられたらいいな……。今日は、楽しかったよ。ありがとね……。

おでこにそつとキスをした。

眠たい目を擦りながら、コーヒーを飲み帰るのでした。

白い空気

癒されし光

あゝ体がギシギシいつてる…。

昨日、未来と遊園地デートした俺、絶叫しすぎて体全体が筋肉痛になってしまった。

今日も就職先を探すと、学校を休んでしまった。(いいのか?)

学校に行くのも、残りわずか。卒業する前に働くお店を探さなくてはいけなかった。でも、俺は決まったようなものだった。だから…休んじゃった!

最近、色々ありゆっくりするって事があまりなかった。

たまには散歩でもするか。天気も良く、散歩にはもってこい!昔…良く行ったな…。

俺が、引越して来て最初の一年、フリーターをしていた。その時、よく近くの河原まで歩いて行ったな…。

初めての一人暮らし。バイトは高校からやってたけど、一人で暮らすって、掃除、洗濯、炊事、全部自分でやらないといけない…。いつも親任せだった俺、苦勞の連続だった。

仲間も、身内も、知ってる人は一人もいない。俺の中で、不安を紛らわす唯一の場所だった。

白い空気
アパートから歩いて十分位の所にある河原。静かに流れる澄んだ

川。太陽の日差しがキラキラと反射し、心を癒やしてくれる場所。

寂しくなった時、辛い時、常連さんのように行ってたな…。

俺は、さっそくラフな格好に着替え、河原に向かった。

久々だな…。

『久しぶり…。会いに来ました…。』

河原に挨拶をし、芝生の上に腰掛ける。

河原は“チャプチャプ”と返事を返す。

空を見上げ、雲を見つめる。

何処の空も同じなんだよな…。

故郷にいた時も、よく空を眺めていた俺は、改めて感じていた。

場所が違っても変わらない空。この空を今、何人の人が見てるのかな…。

遠くを見ながら思う。

未来に紹介したいな…。そして、一緒にいたいな。

白い空気

この河原は、四つの顔をもつ河原。朝日が河原を照らす時、太陽が真上から河原を照らし、キラキラと皆を照らす時、そして、夕陽がほのかに赤く柔らかな光を河原に放つ。夜は、星と月が寂しく河

原を輝かせる。

あ…、もう夕方か…。河原は、俺に時間を教えてくれる。『そろそろ、帰る時間だよ…。』そんな風に、俺に言ってるみたいだ。赤く光る河原。

心の中で“また来るね、ありがとね”って…。軽く手を振り立ち上がる。フウーっと、息を吐き笑顔で歩き始めた。

やっぱりココは最高の場所だ。また来るよ！未来も一緒に…ね。

君の為に…

夕陽も沈み、薄暗くなってきた。今日一日中河原にいた。心も体もスツキリした気分アパートに戻った。

あれ？携帯落ちてる…。玄関の所に無造作に転がってる携帯。行く時に落としたらしい。今思えば、一回も鳴らなかつたな…。持つてないんだから鳴るわけないか…。自分でボケて突っ込んだ！

携帯を拾い、とりあえず開いてみた。

な！着信が…

太一×4 未来×2…

何で、今日に限って…。正直、持って行かなくて良かった…と、思った。

とりあえず太一だな。未来は、話すと長いから…。

テュルル…

『何やってんだよ！』

少し苛立ち気味に話す太一。

『へえ？ちよつと散歩しに…。どしたん？』

俺は、マイペースに返事をし、太一が苛立っていてもお構いなし！

『学校休んだからさあ、デートの事、聞きたくってさ!』

くだらない事で電話すんなよ…。ため息が思わず…。

『明日、学校行くから。そんな時話すよ!んじやな!』

『おい…』

プツ、プープー…

面倒だったから切ってやった。携帯代って、結構高い…。バイトと仕送りだけじゃ、ちとキツイ。出来るだけ節約していた。それでも、未来だけは…。電話しないと怒る。途中で切ると怒る…。女の子の話は長すぎる。はあ…。

テュルル…

……。

あれ?未来が電話に出ない。怒ってるのか…、少し不安だった。あ!仕事か…。

とりあえず部屋に戻り、テレビをつけ、音楽を流した。

バラードをこよなく愛する俺は、CHEMISTRY を聴いていた。

白い空気

フンフフ、鼻歌を歌いながら洗濯をする。洗剤を入れ、漂白剤を入れ、柔軟剤を入れる。後は、洗濯機にお任せ!

暇な時間に小説を読んで過ごす。ふと携帯が気になった。未来からは、まだ…。今日、仕事忙しいのかな…。

洗濯も済ませ、テレビを見ていた。

もう九時か…。 もう一回、未来に電話してみた。

テュルル…

出ないな。

なんか、妙な胸騒ぎがする。 お店も終わってるよな…。

胸騒ぎが…、ヤバい…かも！

俺は、急いで着替え、走って店に向かう。

ハア、ハア…

九時半前、流石に店はやってなかった。練習かなんかやっつって、自分に言い聞かせていた。それだけに、不安がつゆる。

未来が行きそうな所…！居酒屋だ！

また、走り出した。

ガラガラ！

『いらっしゃいー！』

居酒屋のおっちゃんが、笑顔で迎えた。

『おっちゃん！ごめん、ちよっと人探してんだ！』

俺は、おっちゃんに了解をへて、店の中を探した。

やっぱりない……。

『おっちゃん！ありがとね、今度ゆつくり来るから！』 っと言って、店を出た。

マジかよ……。何処にいったよ……。！アパートか？未来のアパートか……。

ハア、ハア……流石に疲れるな……。未来の住むアパートに着いた。あれ？電気が付いてない。

いない？マジかよ……。俺はバテていた。階段に座り体を休めていた。

……。

寝てるって事、ないよな……。寝てたら思いっきり怒ってやる！

ドアの前に立ち、チャイムを鳴らす。

ピンポン……

……。あれ？

白い空気

ドアの取っ手を回してみた。…鍵かかってないじゃん…！ヤバイ！

俺は、急いで中に入った。『未来！…未来！』かなり焦っていた。

電気を付け、辺りを見回す。いないな…。寝室か？

俺は、寝室に向かおうとした…！その時、寝室の方からパジャマの未来が出て来た。

『いるじゃねえかよ！』

俺は、思わず怒鳴ってしまった。

『ごめんね？なんか、熱凄くって…。仕事も早退しちゃった…。』

未来は、フラフラになりながらも、俺に笑顔を振りまく。

とりあえず、未来をベッドに寝かし、氷水を作り額にのせた。

『熱、どの位あるの？』

内心、来て良かった…。少し安心した。

『わからない…。体温計どこかいつっちゃったあ…。心配しなくていいよっ。』

未来は、心配かけまいと俺に微笑む。優しいと言うか、バカと言うか…。

白い空気

俺は、言葉をなくす。どっから見てもヤバいだろ…。顔が真っ赤で汗も凄い。

『薬は？水分ちゃんと取ってる？』

『……。』

何もやってないのかよ…。はあゝ。子供でも、もうちょっとマシだぞ…。

『ちよっと待ってる？』

とりあえず水を飲ませ、俺自身落ち着かせた。

『ちよっとごめんな？』つと、未来のTシャツを触った。

『キヤツ！』

『バカ！違うよ…。』

俺まで顔が赤くなってしまった…。かなり汗かいてんな…。

『これから薬取って来るから、下着とシャツ、着替えとけよ！』

また、走って俺の家まで戻り、車に乗って未来のアパートまで向かった。

薬と栄養をと、バナナとポカリを持ってきた。

『未来？入るぞ！』

一言、声をかけ部屋に入った。冷たいタオルで未来の顔を拭き、ポカ리를飲ませる。

あゝ、体温計忘れた…。未来の額に手を乗せた。

『あ…、司君の手…気持ちいい…。』

未来は、目を瞑りニコツと微笑む。

俺も、優しく微笑み、また氷水の袋を乗せた。

今日は帰れないな…。俺は、徹夜で看病する事にした。

未来は、安心したのか目を瞑りながら眠りについてた。

たまに冷たいタオルを変え、また乗せる。未来の寝顔を見て思う。

俺、やっぱり未来の事、好きなんだな…。最近、未来の事はつか考えていた。自分の気持ちって、案外わからないんだな…。改めて思った。もっと、素直に接しよう。

未来の顔を見ながら、少し幸せを感じていた。

歩と未来

『よっ！おはよ。』

太一に挨拶をし席に着いた。

『司！おめえ、いきなり電話切んなよな〜！』

太一は、俺の机に座り笑顔で愚痴っぽく吐いた。

ふあ〜。眠い…。

『司？眠そうだな！未来ちゃんと何かしたんか？』

イヤらしい顔つきでブツブツ言い始めた。太一の中で、冗談半分で言ったつもりだった。

『おお…徹夜！めっちゃ疲れたぜよ…。』

太一の冗談に付き合う事にした。太一の顔が見ものだ！

案の定、驚いた顔で固まる太一。俺は、眠そうにあくびをした。

『マジ！司、未来ちゃんだよな！』

太一は、一回未来を見に行った事があり、かなりの驚きっぷり。

『あの小柄の未来ちゃん？嘘だろ？』

太一と話していると時間がかかるから、ほどほどにして寝に入った。

『司！寝るんじゃないねえ！ココで寝たら凍死するぞ！』

耳元でウルサイな。太一は、ふざけてんのか本気なのかわからない時がある。太一は、声がデカく、その声は仲間を集める。

『太一、どうした？』

ほらね…。こんな時は、寝たフリ。

『司のヤツ、すげえ可愛い子と一緒にいたんだってよ！』

『マジで？』

相変わらず口軽いな…。あゝ、男連中集合だよ…。

『俺、本人見たもんさ！めっちゃ可愛いかったし！』

早く授業生まれ…。

『な？司！起きろよ、寝たフリ禁止だよ！』

太一は、俺の肩をわざとらしく揺さぶり強引に起こした。

『太一、その子、いる所知ってんの？』

男連中は、可愛いって聞いただけで、一度は見たくなるらしく…。

俺はとっさに…

『太一！バラすんじゃないぞ！』

少し真面目な顔で呟いた。

『それに、さっきのは冗談だよ！ただ、看病してて徹夜したただだよ！』って、言って、また眠りについた。

『何だよ……。でも、一緒にいたのは事実なんだよな？』

俺は、軽く手を上げホントに寝てしまった。

あれ？未来だ……。何だ？パジャマのまんまじゃん。風邪良くなつたのかな？

未来は、俺に何か喋ってる。ん？聞き取れない……

……つか……司！

『ん？未来？』

『鷹山君！お目覚めかな？』

先生？ん……。俺、寝ちゃったんだ。

『あ！すみません……。』

笑って誤魔化した。

ポケットとシャーペンを回しながら雑談を聞いていた。

でも、昨日は大変だったな…。

徹夜で看病なんて、何年ぶりだ？

俺には弟、歩あゆむがいた。この四月で高校生だ。歩が、まだちっちゃい時、高熱をだした事を思い出していた。

親は、身内のなんかの用事で泊まりだった時だった。二人でご飯を食べ、お風呂に入り、全部やってのけた。

夜になり、歩が熱いって訴えて来たんだ。額に触れば、かなりの熱。当時、中学生だった俺は、どうして良いかわからなく、とりあえず寝かせた。アイスノンで冷やし。タオルで汗を拭く。水分をマメに取りらせ、シャツを着替えさせた。

それを、ひたすら寝ずにやった。

歩がいたから、未来にも出来たのかもな。流石に、未来の着替えを俺がする訳にはいかないけどね。

俺は、外を見ながら、そっと微笑んだ。

未来…、良くなったかな。学校終わったら顔出すか…。

優しさのカタチ

少し未来の事が心配だった。“風邪を甘くみるな”親父が良く言っていた。本当は、親父に兄貴がいたらしい。子供の時、肺炎で死んだって…。今は、医療が進んでいて、肺炎で死ぬなんて、そうはないだろうが、昔は良くあったみたいだ。

学校も終わり、心配で居ても立ってもいられない俺は、すぐに未来の元へ向かった。

ピンポーン

チャイムを押す。少しドキドキした。昨日は、緊急だったから何も考えず入って行ったが、よく考えたら女の家なんだよな…。俺にあの時の勇気をくれ…。

『は〜い!』

あれ?何か声が…

中から出て来たのは、同じお店で働く綾乃だった。

『あら…。鷹山君じゃん!どしたの?』

少し驚いた顔をする綾乃。そして、俺を中に入れリビングへ通され、キッチンからお茶を出してきた。見た目よりシツカリしてる人だな。テキパキとお茶をよそり、“ふう〜”っと、ため息…。黒いベストを着て、ネクタイをしていた。仕事なのは一目瞭然。

昨日の事を綾乃に話した。

『そうなんだ。ふくん。』

その“ふくん”の意味が、俺には理解出来なかった。

未来は今、寝てるらしい。綾乃は、未来の先輩にあたる人で、教育担当でもあった。

お店が暇で、未来の事が少し心配だったから、店長に了解を得て様子を伺いに来た…らしい。

お茶をすすりながら、少しの時間、沈黙が続いた。

『未来、具合良くなりましたか？』

とりあえず、何か喋れないと場がもたない…。気になってたつてももあり、率直に聞いた。

『あんまり良くないかもね……。』

深刻そうな顔をする綾乃。その表情を見た俺は、居ても立ってもいられなくなつた。

『え？んじゃ病院行きましようよ！車、出しますから！』

俺は、急いで帰ろうとした…

『鷹山君って、ホント未来の事、好きなんだね。』

「はあ？何言ってるんだ…。そんな事、言ってる場合じゃ…」

「嘘！ホントに悪かったら、とっくに連れてってるよ。」

綾乃は、軽く微笑み未来の部屋の方を見た。

この人、冗談キツすぎだよ…。

「未来って、頑張りすぎなんだよね…。風邪引いて熱もあるのに、でも、無理して仕事して…。結局、倒れちゃって…。」

少し寂しげな綾乃…。綾乃も未来の事、好きなんだな…。

「鷹山君？ありがとうね？未来、大分、元気になってきたよ？」

綾乃は、優しく微笑み、そして立ち上がった。

「私、そろそろお店戻らないと。」

綾乃は、玄関の方まで歩いて行った。俺も、後をついていく。

「さつき、未来の事凄く怒ったから、後でフォローしといてね。」

綾乃は、ニコツと笑いながら手を振り出ていった。

怒ったのか…。だから、あんな寂しげな顔してたんだな…。

綾乃って、凄く良い先輩なんだな…。少し羨ましがった…。

俺は、一人ソファーに座り、何をするのでもなく、ただそこにい

た。

いざ、一人になると…、困った。

さっきの綾乃の言ってた事が気になっていた。

未来、怒られるような事、するようには見えないけどな…。ワガママだけど…うん！ワガママだ！

お茶をすすりながら考える。その時、寝室から未来が出て来た。

『あ！司君？』

目を擦りながら近づいてくる未来。

『よっ！体調の方は？大丈夫？』

未来にポカリをよそって飲ませた。

『もう治った！綾乃は？』

治ったって…。

『忙しくなる時間だから戻るって。』

『そっか…。』

少し寂しげな未来。コップを置き、“はあく”って、ため息…。

なんだ？今度は未来のため息…。魂が抜けそうな感じだな…。

『まだ、体調良くないんだろ……。ため息吐いちゃって……。』

未来は、少し黙って俯いていた。そして、話し始めた。

『綾乃に怒られたんだ……。仕事で怒る事はあっても、プライベートでは……。初めてだな……。』

怒られた事がショックだったのか、目につつすら涙を浮かべていた。

未来って、案外もろいんだよな……。綾乃も、それを見抜いて……。フォローか……。

『何で怒ったかは知らないけど、綾乃って、未来の事凄く心配してたよ？綾乃、自分で言ってたんだ。未来の事、凄く怒ってたって！その時の綾乃の表情……。寂しげだったな……。』

『そっかあ……。』

さらに落ち込む未来。でも、心なしか嬉しそうにも見えた。

優しく接する時もあれば、厳しくする時もある。仲間を怒るって事がどれだけ辛い事か……。綾乃が教えてくれた。言う方も、言われる方も辛い、でも、言わない方がもっと辛い。どうせ言うなら、愛を持って接して行きたいな……。

面接大作戦

来週には、この学校ともおさらばだ…。嬉しい様な、寂しい様な…。

教室で、太一と話していた。

『太一、まだ店見つかってないのか？ヤバくない？』

今まで、何してたんだ…。普通は就職先を探し、面接をする為に設けられた期間。太一は、休んで遊び惚けてたらしい…。

俺は、太一の肩を叩き、『お疲れ様…。』って…。呆れて物も言えない。

席を立ち、他の仲間の所へ行こうとした。

『司！頼む、俺を見捨てるな！』

太一は、真面目な顔で俺にしがみついた。俺は、その太一の顔を見て、思わず“プツ”って、吹いてしまった。

太一は、“何が可笑しい！”と、言わんばかりの顔をし、俺に訴えた。

『来週には卒業だぞ？何やってたんだよ！』

太一は、何も言えず…。でも、俺の手を離すつもりはなさそうだ。

しょうがない…。とりあえず、俺が働くと決めた店、“Whit e Care”を、一緒に面接する事にした。

学校も終わり…

ちょうど面接のアポをとっていた。いきなり二人って、大丈夫なのかな…。

ま！俺は大丈夫だろうが…、太一は…：まあ、いいか！

俺の後を付いてくる太一。不安は隠せないようだ。

“忙しくない時間に来てくれ”と、言われてた。

ガラス越しから店内を覗き、暇がどうかをチェックした。

『今がチャンスじゃん？』

太一と、顔を合わせ、いざ突撃！

『こんにちは！面接に伺いました。』

知ってるとは言え、礼儀はわきまえる。社会人としての最低限のマナー。

店内は、良い香りがした。癒やしと少し高級感を目的としたピアノの音色。

『お！よく来たな。』

笑顔で迎えてくれる店長。そして、未来とスタッフ。

ん？つて、顔をする店長。

『面接：もう一人良いですか？』

俺は、ダメもとで聞いてみた。

太一も、『お願いします。』と、頭を下げお願いした。

『いいよー！』

店長は、ためらいもなく了解した。

俺達は、お互いに顔を見合い微笑んだ。そして、奥のスタッフルームに案内された。

履歴書を渡し、幾つかの質問を受けた。少し、緊迫した雰囲気の中で、面接は続く。今までの店長とは違って、真面目な顔をしていた。経営者としては当たり前だが、この先、良いスタッフになるかどうか、やる気があるかどうかを見極めないといけない。

俺は、少し甘く見ていた。余裕をかましていたが、徐々に不安がつる…。手に汗を握り締めながら話を聞いた。

この“White Care”は、“Care グループ”の、本店に当たるらしい。他にも、八店舗の店を構える。高級感を目的とした店、カットだけの店、メンズを対象とした店、あと、ココ、メンズもレディースも両方の店。他にも、育毛やら美容やら…。

幅広くやっってる会社みたいだ。

『ハッキリ言っておく！この店に二人は必要ない！どっちかは、他の支店に行ってもらうかもしれないが、それでも良いか？』

『ハイッ！』

俺達は、ハモる様に返事をした。

『んじゃ、卒業したらもう一回この店に来てくれ。説明はその時する！期待してるよ。』

店長は、ニコツと微笑み面接を終わらせた。

どうにか採用されたようだ。少し安心した。でも、ココからは甘えが許されない世界だ。

その後も、いつもの様に店長の愚痴が始まった…。さっきまでの緊迫感は何処へ…。太一は、店長の愚痴は初めてだったから結構笑ってたが、俺はしょっちゅう…。たまに未来の事、言ってるような…。

ま！俺は、この店で決まりだろう！未来と一緒に頑張ろう！太一には悪いが、支店で頑張ってるね！違う意味で笑ってた…。

残り僅かな自由

面接を終え、店長の愚痴もどうにかクリアー！あく疲れた…。

あの時、未来が店長の事呼びに来なかったらと思うとゾツとするよ…。

太一も、心なしかげっそりした表情をしていた。

俺達は、店にいる時、少し店の内容を聞いていた…

この店は、訓練校として登録されてるらしい。

卒業して、すぐに研修に入るみたいだ。研修内容は、教えてくれなかったけど…。

練習は、強制的にやる日と、自主的にやる日があるらしく、トレーニングルームが他の場所に完備されていて、自由に使える。幹部が力ギを持つてるらしく、お願いして見てもらう。その他にも、男子寮、女子寮もあり、設備は充実していた。

週に二回、ミーティングがあり、それも班が別れてて、教育、動員、材料、幹部と…。

店の事を熱く語り始めた店長…。徐々に声がデカく…。俺達は、その勢いに負けそうに…。

そこに未来が来てくれたんだ！

『店長！うるさい！お店の中まで聞こえてきますよ！お客様、来ましたので宜しく願いします。』

未来は、眉を寄せて店長を叱る！

その後、俺達を見て微笑みドアを閉めた。

店長は、下唇を出して“まただよ”って…。

忙しくなってきた店内は、活気に満ち溢れていた。忙しくなればなる程、笑顔が出て雰囲気良くなる。そんな店を目標にしてるらしい。店長の、理想のお店になってきてるって笑顔で語ってた。

太一と、歩きながら思った。もしかしたら、凄いい店に俺達入るんじゃない…。

店長は、あまり言いたくなかったのかも…。店に入る前に辞めちゃう人、いるかもね…。ココにも…一人。

太一…、何か微妙な顔してるな…。少し心配だった。でも、俺が心配した所で最終的には自分で決める事だから…な…。

歩きながら思った。太一、残り僅かの学生生活をエンジョイしような！太一の肩をガツチリ掴み、『楽しむぞ！』。太一も、覚悟を決めたみたいだ。『おっしや！』って…。

その夜、未来からいきなりの誘い…。俺と太一のちょっと早めの卒業パーティーだって…。いつも、いきなり…。

『司君？太一君と一緒に“ 呑 ” 待ってるね！』ピッ…プープー…。

ワガママ星人め…。

結局、太一と共に居酒屋に向かった…。いきなりの誘い。俺達は、ニヤニヤと笑いながら向かうのであった…。

居酒屋で、ドンチャン騒ぎになるのは言うまでもない…。

飲み会となると、俄然元気になるはずの太一。

顔では笑っていても、いつもと違うな…。少し、無理してる気がする。

大丈夫かな…

卒業、そして…

桜が咲く頃、俺は卒業を迎えた。これで学校の仲間とも会う事もないのか…。

今まで、共に学んだ仲間と、会う事もないなんて…少し寂しいな…。

皆、卒業式の後、飲み会やら打ち上げやら、何かしらの口実を作り集まるらしい。

俺は、これから店に行くんだけどな…。

泣いてるヤツ、笑ってるヤツ…。色んな感情が現れる時…。俺は、平然としていた。

飲み会の誘いはあった。切り返しの早い俺は、『これから仕事場行くからさ…、ごめんね。』って…。今日位はいいじゃん…って、思ったが、最初が肝心とも思っていた。俺は、俺の道に行く！そう決めたんだ！

太一を探していた。なかなか見つからない…。いつもなら太一から声かけてくるんだけどな…。

結局、太一は見つからず諦めて店に向かう事にした。

『司君？』

“ん？”って、俺は振り返る。

そこにいたのは瑞希みつきだった。

彼女は、二年間ずっと同じクラスで席も隣だった。色白の天然少女。おとなしいタイプの女の子で、色々と話の合う子だ！

『どしたの？』

『うん…。司君は、何処のお店かな…って…。』

『俺？駅前の White Care って店だよ？それがどしたん？』

俺は、ニコツと笑いながら答えた。

『ホント？私も、Care グループの Black だよ？』

瑞希は、目をまん丸にし驚いた。そして、嬉しそうな表情で微笑んだ。

Black は、店の内装が White の逆の造りで、少し大人の雰囲気を出したお店だ。

『そうなんだ！良かった〜！太一も一緒の系列だぞ！店は違っけど…！』

俺は、少し嬉しかった。知ってる人がいるっただけで、環境や人間関係って、随分変わるからね。

『もしかして、これから店行くの？』

『行くよ！でも、White のお店、何処かわからない…。』
わからないって…、さつき、駅前って言ったじゃん…。やっぱり…天然…。

『んじゃ、一緒に行こっか？』

『うん！』

嬉しそうだな。瑞希、かなり不安だったんだな…。さつきまで不安が顔いっぱいに出ていた瑞希。不安が晴れたせいかな、色白の肌がより一層白く輝いてる気がした。

瑞希と話しながら店に向かう。

『ココを、左に曲がれば店見えるよ！』

瑞希は、分かりやすい癖があり、嬉しい時、楽しい時は、ピョンピョンと跳ねる様に歩き、悲しい時や寂しい時は、足取りが異常に重く感じさせる歩き方をする。面白い子だ。

そして、今の瑞希はピョンピョンと、軽い足取りで店に向かっていた。

左に曲がり歩いていると…

『おい！司、おせえよ！』

太一が、店前で一人騒いでいた。

白い空気

白い空気

『遅いって…。』

太一！お前を探して遅くなったんだろ？が…。瑞希と顔を合わせ、急いで向かった。

ライバル

卒業し、新たな一步を踏み始めた。二人の仲間と共に…。

瑞希と一緒に、太一の事を探していた…。そのお陰で、少し遅れてしまった。

その張本人は、俺の事をネタにし笑っていた…。太一って…。

『これで全員揃ったかな？』

店長は、店の前で笑顔で仁王立ち。ニコニコしながら、かなりのご満悦だ。

今年入るのは、全部で八人らしい。今、いるのが…5、6、7…
…7人だけど…。あれ？

『八人来る予定でしたが、一人は電話があつたから…、ココにいる君達が今年の新人さんです。お互い、良く顔を見ておいて下さい。未来のライバルですから！』

何て偉そうな…。いつも愚痴ばっか言ってる人なのに…。

いつもは明るい奇策な店長。未来から聞いた話だけど、実はかなりの切れ者らしい…。他の支店の店長も教育しているみたい

白い空気

タウンエリアとシーサイドエリアに別れて競い合う会社。同じ系列で競い合うんだから、勢いが違う。その中で、タウンエリアをまとめる店長。凄くない訳がない！

『明日から研修に入る訳だが、その前に皆に言って起きたい事がある！』

今日からじゃないんだ…。太一を見、瑞希を見、少し緊張する俺。

『頑張れよ！以上！』

店長は、笑いながらプリントを配り始めた。

それだけかよ…。集まった人、皆、緊張させといて“頑張れよ”一言…。思わず苦笑してしまった…。

プリントには、研修場所、時間、持ち物等書かれていた。

その後、プリントの説明があり、店長は、仕事場に戻った。

太一は、俺の顔を見ながら呟いた。

『今日、飲み会行けたじゃん！』

『はあ？太一、何で先に行っちゃってんの？探したんだぞ！』

俺と瑞希は、太一を責める様に睨んだ。

『ああ…、ごめん。まっ！今日は、卒業だしおごるからさ！』

俺は、当たり前前だと、思いながら太一、そして、他の四人を見ていた。ライバルか…。

これから同じ系列で働く仲間として、『よろしくね!』って、軽く挨拶を交わし、顔をよ〜く覚えた。

せつかく店来たし、未来の顔も見たいな…。

ガラス越しから店の中を覗き、未来を探す…未来もコツチを見ていた。

俺は、笑顔で手を振ろうとした…その時…

『司君?』

瑞希が後ろから呼んだ。

振ろうとした手を下ろし、瑞希の方を向く俺。少し未来の事が気になったが…。

『ん?なに、瑞希。』

『行く?』

笑顔で俺の腕を引っ張る瑞希。

『おお…。』

未来に、手を振ろうともう一回、未来を見たら…もうコツチを見てなかった…。なんか、微妙な風が流れた気がした。

何でもないと思ってた。軽い気持ちで思っていた。

白い空気

でも……

瑞希

結局、店に行った俺達は、二時間とかからず解散する事になり、時間を持って余す結果になった。

とりあえず、太一がおごると言うことで、今となつては俺も常連の顔となった居酒屋“ 呑 ” に行く事にした。

これから仲間になる他の四人も誘つたが二人だけ、一緒に来ると…。五人で呑に向かった。

『改めて、宜しくね。俺、鷹山 司。』

酒を飲む前に軽く自己紹介した。

『初めまして、河原 瑞希です。』

笑顔で軽く頭を下げ挨拶をした。

『宜しくね！森 太一っす。』

太一…あまりにも軽すぎるぞ…。

『私、下山 あゆみです。仲良くしてね。宜しくね！』

『あゆみと同じ専門の藤田 葵です。よろしくね。』

なんか、二人とも可愛いな…。

とりあえず、店員を呼び、ビールと焼酎を注文した。女の子達は、お酒は飲めないと、ウーロン茶を頼んだ。

『とりあえず、乾杯』

皆で、グラスをぶつけながら乾杯した。

専門の話で盛り上がり、彼氏、彼女の話になり、初めの頃よりはお互いに打ち解けてきた…かな？

お酒の酔いが少し回ってきた頃、瑞希も焼酎を飲むと言い初め、薄めで注文した。

『なんか、楽しくなってきたぞ？』

太一は、もうただの酔っ払いだな…。顔を真っ赤にし、ろれつも回ってなかった。

俺は、あまり酔うと何かあった時、まずいから少しセーブしながら焼酎を飲んだ。

『司君？あまり飲まないね…。』

一杯しか飲んでない瑞希。すでに顔が真っ赤に…。

『瑞希、無理すんなよ？』

グラスを一回取り上げて、ジュースを注文した。

『お前は、これのが似合う！』

俺は、少し笑いながら瑞希をからかった。

瑞希は、『子供じゃないよ』と、少し怒った表情で焼酎を持ち、飲み干した。

『店員さん？もう一杯ください！』

瑞希は、酔ってるのか…、笑顔で焼酎を注文した。

瑞希って、もしかして酒癖悪いのか？少し不安になる俺…。

『んじゃ、私達はそろそろ帰るね。明日、遅れない様にね？』

『うん！気を付けてね！また明日！』

俺は、軽く手を振り見送った。

葵は、笑顔で挨拶をし、あゆみも軽く会釈をし帰って行った。

太一にしろ、瑞希にしろ…。何でこんなに酔ってるんだよ…。

今日はもう限界と、会計を済ませ店を出る事にした。

太一はまだ歩けるな！問題は…瑞希。

『太一！大丈夫か？歩いて帰れるな？』

太一は、フラフラと勝手に帰っていった…。

太一の野郎…。結局、俺が払う事になったじゃないか…。それより…瑞希。

『だから飲むなって言ったじゃないか!』

『ごめんねえ…司君…。』

俺、瑞希ん家知らないぞ…。

とりあえずバス停のベンチに座らせ、酔いを覚ます為に水を飲ませた。

『気持ち悪い…。』

はあ?勘弁してくれよ…。俺が泣きたくなってきたぞ…。

『あれ?ちよっと待ってる?』

俺も、ちよっとトイレが近かった為、近くのトイレにダッシュ。

急いで戻ると…、寝てるよ…。マジ二度と酒飲ませない!俺は、神に誓った!

春とはいえ、夜は少し冷えるな…。

瑞希の家も分からない。本人も眠ってるって事で、おぶってアパートに連れて帰る事にした。(大丈夫かよ…)

不安はあった。後で、誤解を招くだろうな…。でも、ココにはおっつては行けないから…。

散々な飲み会だな…。酔いも覚めるわ…。歩きながら、一人愚痴をこぼす俺…。

『何？』

瑞希は、寝ぼけてるのか、ボソボソ呟いていた。

……。

『司君の背中暖かいね…。スー、スー…』

何も言葉が出ない…

明日、大丈夫か…

大騒ぎだった飲み会。俺は、まだ気付いてなかった…。未来から電話があつた事に…

寒く切ない思い

瑞希をおぶりながら歩いていた。

未来のアパートの前を通り過ぎようとした時、ふと思った。俺ん家より、未来ん家のがいいよな…。

エレベーターで上がり、玄関前まできた。さすがにしんどい…。チャイムを押す時に気付いた。

電気…ついてない…。俺は、ため息を吐き、渋々エレベーターで下りた…。

チン

エレベーターのドアが開く……！

目の前には未来が立っていた。

お互い驚いた表情で固まった。

俺は、安心して未来に話かける。

『お疲れ様、あのさ…。』

俺の事を無視してエレベーターに乗り込む未来…。

あれ？

『未来？』

ドアは閉まり、上に向かっていく…。

何だよ、あの態度…。

結局、瑞希を連れて俺ん家に連れてく羽目になった…。

未来のアパートから、10分位歩き、やっとの思いで到着。

玄関の鍵を開け、中に入る。

『気持ち良く寝てんな…。』俺は、ブツブツ小言を言いながら瑞希をベットに寝かせた。

俺の部屋に女を入れたのは初めて…。どうしたものか…。

とりあえず風邪を引かないよう、瑞希に布団を掛け、俺は風呂に入る事にした。

洋服は洗濯機に突っ込み、ズボン…。ポケットから携帯を取り出した…。

携帯を開き、着信をチェック…。未来からの電話…。それも3時間前！留守電も入ってる！

『一件目…もしも？未来です…。電話下さい…。』

『2件目…今、何処にいるの？寂しいよ…。』

『3件目…司君、何で?』

『4件目…バカ…。』

『5件目…』ピツ…

途中で聞くのをやめTシャツを着た。

俺は、外に飛び出し未来に電話をする。

『電源が入っていない為か…』

ちくしょ!切ってるな…。

何で俺は熱くなってんだろ…。たまに思う…。

俺達、別に付き合ってる訳じゃないよな…。でも…。

初めて会った時から未来は積極的だったし…。普通だったら有り得ないよな…。でも…。

恋愛に関しては、今までの経験からあまりポジティブに考えない方が良いと…。期待して、期待して裏切られるパターンがほとんどだった。少し、恋愛から逃げている自分がいた。

未来に会いに行くか…。

その時、部屋の方から瑞希の声がした…。

俺は、玄関を開け…『起きたか?』って、声を掛ける。

『何で、司君の部屋？』

俺は、頭をかきむしり、そしてため息を吐いた。

『瑞希が酒飲んで寝ちゃったの！瑞希ん家、わかんないしバスもないから、とりあえず家に連れてきた！何もしてないよ！』

一気に全てを話した。

『ごめんなさい…。』

瑞希は、俺の勢いに押されたのか、少し怯えるようにちっちゃくなっていた。

『帰るんなら、車出すよ？』

『司君…怒ってる？』

俺は、その言葉に“はっ”と、我に帰った。怒ってる訳じゃなかった。ただ、色んな事が重なり過ぎて……、情けねえ…、女に当たるなんて…。

『ごめん…、当たるつもりはなかったんだ…。ごめん。』

俺は、素直に謝った。そして、瑞希を車で送る事にした。

車に乗り、走り出した…、あれ？今、人が…いたような…。バツクミラーで確認しようにも、闇に包まれて見えなかった…。

瑞希を家まで送り、引き返した。

もう1時か…。未来…寝てるだろうな…。

起きてる事を祈り、アパートに向かった。結局、電気についてはいなかった…。

寝るよな…。明日も仕事だし…。

チャイムも鳴らす事なく、帰る事にした。

車を走らせていると、ポツリポツリと雨…、雨は次第に強まり拳げ句の果てには氷まで…。正直、ビビった…。

今日は、災難続きだったな…。首の骨をポキポキ鳴らしながら車を走らせた。

未来…何処に行ったんだろうか。綾乃の家かな…何て思いながら駐車場に車を止め、走ってフロアに駆け込む。

より一層、強まる雨…バチンバチンと激しくぶつかる氷…。

少し嫌な予感を感じながらエレベーターに向かった…。

あれ？誰かが倒れて……未来！

『おい！……未来！』

白い空気

未来の行きそうな所に顔を出し、未来を探す…。

これだけ探して見つからなかった未来が、俺のアパートのフロアにいた。

激しく降る雨、雷も鳴り響く中、俺の前で意識のない未来が横たわっていた。

一瞬、今何が起きているのか、まったく理解できない…。

数秒、たった数秒…。だが、その一秒がヤケに長く感じたのは何でだろう…。

『おい！未来…。』

肩を揺すり、未来を呼んだ。服、ずぶ濡れじゃないか…。どの位待ってたんだ？こんなに濡れて…。『未来、起きろ！』何度も、何度も呼んだ！

俺の上着を被せ、未来を抱きかかえる。

体が冷たい…。

急いでエレベーターに乗り、部屋に向かった。

未来をベッドに寝かせ、暖房をつけた。

『未来！大丈夫か？』

くそっ！意識が戻らない…。俺は、救急車を呼び、未来を見つめる…。

今、出来る事…

無我夢中で、俺が今、出来る事を探した。

顔を拭き、髪を拭く…。服を脱がせ体を拭いた…。トレーナーを着せ、布団を掛ける。手を握り締め、願う…。

頼む！目を開けてくれ…未来。

目を瞑り、祈る…

時間だけが過ぎていく…。このまま意識が戻らなかつたら…。

熱いものが込み上げる…。

その時、遠くの方から音がした。救急車だ！

俺は、立ち上がり外に出ようとした。

俺の手を誰かが握っていた…。俺の手には、真っ白い手。ふと、未来を見た…。

今までたまっていた熱い気持ち、瞳から一気に流れ込む…。

白い空気

『未来！』

未来は、弱々しくもニコツと優しく微笑む。

俺は、嬉しさの余り、未来を抱き締めた。『未来…ごめんな？』
何度も何度も謝り、涙を流した。

『司君？司君の声、聞こえたよ…。未来の事、呼んでくれてありがと…。』

泣きながら俺の手を握り締める未来。

『司君？大好きだよ…。』

優しく微笑み、眠りにつくように静かに息をひきとった…。

『未来…未来？おい、未来！』

俺は認めない…。未来がこの世から消えるなんて…、絶対に…。

そんな時…

未来の体から、白い空気みたいなものが…、部屋いっぱいに広がる。まるで天国のように澄んだ空間が目の前に…。

え？未来は…。

暖かな陽気…広々とした草原。懐かしい風。心地よい…。

俺は、いつの間にか眠りについてた…。

あれ？未来は？っていつかここは何処？

真っ白な天井…。

気が付いたら病院のベッドに寝ていた…。窓が開いていて、心地よい風が吹いている。

未来と一緒に運ばれたのか…。

俺は、ベッドから降り未来を探しに行こうと…

親父、お母さん？な、何で？

親父達が泣いている…？はあ？

『良かったね…。』

何が良かったんだ…。

あれ？

今、起き上がったはず…。何で横になってるんだ…。

何か変だ…。

親父達も変な事ばっか言ってるし…。正直、訳がわからなかった…。

白い空気

後で聞いたんだが、俺は、三年前からずっと意識が戻らない状態

だった…らしい。

んじゃ…未来は？

…夢？

でも、この記憶…ハッキリした記憶。何でだ…。

現実を見つめるまで、どの位かかったかな…。毎日のリハビリ。苦しくても未来の事を思い出す度に乗り越えられた…。

今も忘れる事のない未来の記憶。

毎日の努力の結果、松葉杖ではあるが、外に出る事が許される位まで回復した。

日差しを浴び、肌で自然を感じた。

暖かい陽気、広々とした草原。懐かしい風…心地よい。

空を見上げ、大きく空気を吸い込んだ…。『うわああ！』そのまま後ろに転んでしまった…。

『いつてえ…。』

クスクスッ…

転んだ俺を見て、笑っている人がいた。

“何だよ！しょうがないじゃんか…”って、思いながらも笑って

誤魔化する。

優しく声をかけて、手を差し伸べてくれた。

『司君、ありがとう……。』

白い空気

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

PDF小説ネット発足にあたって

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8028b/>

白い空気

2009年6月27日03時34分発行